

輸入粗飼料の情勢

全酪連購買部
購買推進課

新年明けましておめでとうございます。
本年も宜しく願い申し上げます。

今年も「輸入粗飼料の情勢」をご愛顧のほど、どうぞ宜しくお願い致します。

北米コンテナ船情勢 西海岸港湾の混雑悪化・堅調な海上運賃

14年6月末で失効となった後も、6年ごとに更新されている米国西海岸港湾での労使協定は締結されないままとなっています。雇用主PMA（Pacific Marine Association：船会社やターミナル運営者で構成される使用者団体）と、労働組合ILWU（International Longshore and warehouse Union：西海岸各港の港湾労働者で構成される労働組合）との交渉は年内に妥結がされず、交渉が越年となっており、1/5より再び開始されている模様です。

年末からは、ILWU側が熟練度の低い作業員を働かせるなどして、意図的に荷役効率を悪くさせる、いわゆるスロークワーク戦術をシアトル/タコマ港やオークランド港で実施し、少しでも交渉を有利に進めようと画策していますが、PMA側は一切妥協しない姿勢をみせており、出口の見えない状況が続いています。また、両港を避けるために貨物が増えたことや、経由地が両港となっている航路も多いため、ロサンゼルス/ロングビーチ港出しのコンテナ船についても影響が波及しており、デリバリーの乱れは、引続き西海岸全域で続いています。

労働者（ILWU）側がストライキをしているわけでも、使用者（PMA）側がロックアウトをしているわけでもないため、港湾施設・ターミナルが完全にはストップをしていませんが、港湾労働者やトラック運転手の著しい不足により、港湾の混雑はさらに悪化しており、年が改まってもなお船積みが遅れ続けているのが現状です。1/6よりFMCS（Federal Mediation and Conciliation Service：米国連邦調停局）が仲裁役として交渉に介入するとの情報もあり、早急な労使交渉の決着を願うばかりですが、妥結されてもすぐに混雑は解消されず、落ち着きを取り戻すには相当な月日がかかることも懸念されています。今後も動向については、細心の注意が必要です。

海上運賃については、原油価格の弱含みも影響して、北米のコンテナ船航路では1-3月分のBAF（Bunker Adjustment Factor 燃料費調整係数：燃料価格変動に対

して調整される割増運賃)は、\$84/コンテナの値下げが実施されましたが、12-1月にかけて、他に様々な負担増の案内が来ています。

まず、GR I (General Rate Increase: 基礎レート)について、どの船会社もコンテナ部門の採算悪化が続いていることから、大半の船会社で、12/1付で\$100/コンテナの値上げが実施されています。また、前月号でご案内の通り、各船会社から1/1付でロー・サルファー・サーチャージ (Low Sulfur Fuel Surcharge: 低硫黄燃油サーチャージ) と呼ばれるチャージの導入が発表されており、1月から積む分より\$47/コンテナの負担増となります。さらに、西海岸港湾の混雑を受けて、一部の船会社からポート・コンジェスチョン・チャージ (Port Congestion Charge: 港湾混雑チャージ) と呼ばれる特殊チャージの導入が検討されています。このチャージは、概ね\$1,000/コンテナと非常に高く、強い警戒感が広まっていますが、予告があった12/21付での実施は回避された模様です。しかしながら、前述の通り、港湾の混雑は解消されていないため、再び導入が示唆される可能性もあります。

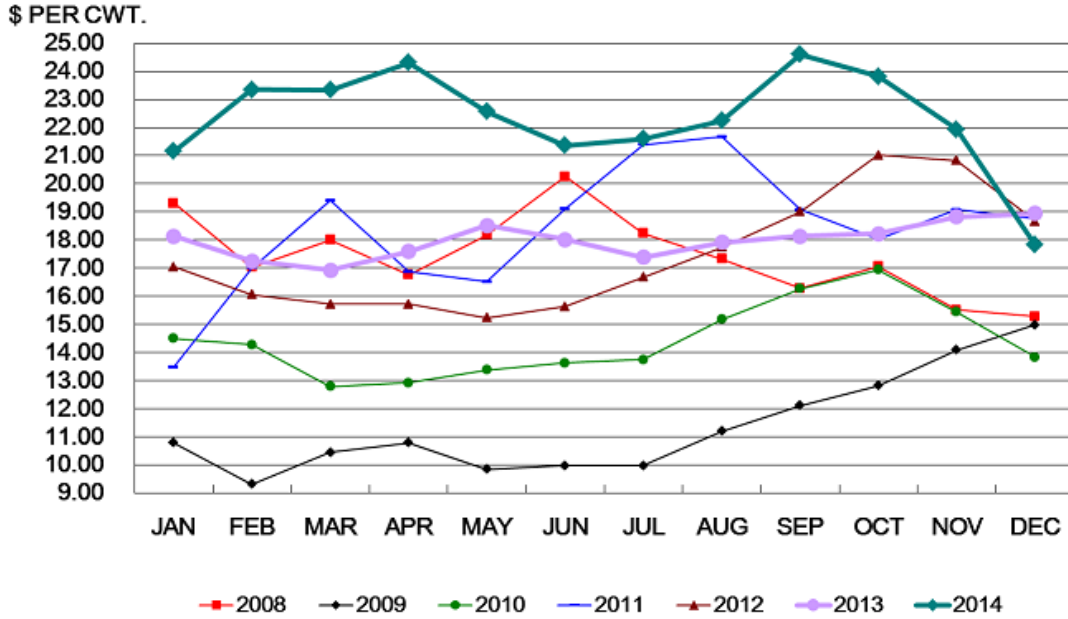
以上のように、GR I、低硫黄燃油サーチャージ、港湾混雑チャージと、船会社も(悪く言えば)あらゆる切り札を利用して、港湾の混雑に絡むコスト増を荷主側に少しでも負担させようとしているのが現状です。西海岸港湾の混雑から始まっている船積みの乱れの影響で、荷動きにタイト感が増していますが、日本側で“パニック買い”のように引合いが強くなればなるほど、これらのチャージは、価格が高く、期間が長く、掛かることとなります。通常時と同様に、冷静かつ適正な買付けやデリバリーに徹することが、肝要であると思われます。

米国の乳価動向 軟化傾向か

米国の乳価(下記グラフ参照)について、14年1-11月は\$20を下回ることなく、史上最高値の水準で推移していましたが、12月は11月に比べて\$4以上も値下がりし、\$18を下回る結果となりました。乳製品の国際相場価格は、以前よりも軟化して推移していたことから、今春以降は米国乳価も軟化傾向にあると、昨年から予想されていましたが、ようやくその通りに、乳価は落ち着きを取り戻し始めていると考えられています。背景には、米国乳価の高騰を招いた中国からの粉ミルクの需要が一服したこともある、とされています。

これまでの米国乳価の高騰は、14年産アルファルファの産地価格高騰の最大の要因ともなりました。この乳価の軟化傾向が1月以降もさらに続き、14-15年産の輸出向けアルファルファの産地価格が大きく軟化することが、早くも期待されますが、米国の酪農情勢・乳価動向については、今後も引き続き注意が必要です。

CLASS III MILK PRICE AT 3.5%TEST



米国乳価グラフ：クラスⅢ チーズ向け CWT（100ポンド≒45.4kg）当たり \$

ビートパルプ

<米国産>

14年産のビート大根の収穫は9月上旬より開始し、各地で製糖作業が続いています。ビートパルプの輸出向けの主産地であるミネソタ州とノースダコタ州では、春先に冷涼な気候が続いたため、過去10年で最も悪い作柄であるとも言われています。そのため、単収は例年よりも少なく、ビートパルプの生産量は、かなり減少することが見込まれています。

<中国産>

中国では、今年は2/18から2/24までが旧正月の祝日となっています。かつては旧正月前に、輸出向けビートパルプの売買が盛んに行なわれていましたが、昨年3月から日本向けの輸出実績は途絶えており、中国産に輸出余力が戻ることはない予想されています。日本以上に依存度が高かった韓国向けについても、輸出実績はしばらく途絶えている模様です。

アルファルファ

米国乳価が史上最高値の水準で推移したことや、カリフォルニア州を中心とした大旱魃（干ばつ）の影響で、米国内の酪農向けや肥育向けからの引合いが急増したことから、14年産の米国産アルファルファは、産地価格が高騰してシーズンがスタート

しました。その後は、どの産地の番手でも、雨当たり被害が多く発生しました。アルファルファの生産量は増えていますが、良品は西海岸全体で不足している結果となっています。そのため、全体の需給のバランスから考えて、今後も14年産アルファルファの産地価格が極端に下がることはないと考えられています。

一方で15年産については、作付面積が増える見込みのなかで、前述の米国乳価の軟化が期待通りに進むと、アルファルファの産地価格も軟調に推移する可能性も出てきました。しかしながら、少し軟化しただけで中国向けやUAE向けが大きく買付けをする可能性も近年ではあることから、今後も動向には注意が必要です。

チモシー

<米国産>

14年産1番刈の産地価格は、13年産に比べて軟化傾向にはありますが、期待されたほどの値下げには至らず、同じく作柄が良かった3年前よりも高値で推移しています。シアトル/タコマ港の混雑の影響により、日本向けは現在、特に馬用のハイグレード品の引合いが強いとも言われており、またカナダ産の作柄が14年産でも芳しくないことから、米国産チモシーの産地価格は、これ以上は軟化することもなく、堅調に推移することが予想されています。為替円安の状況下で、酪農向けには費用対効果のある価格帯ではなくなっているのが、引続き米国産チモシーの現状です。

<カナダ産>

レスブリッジ（アルバータ州南部・灌漑地域）では、14年産1番刈は収穫期の天候に恵まれず、大半が中間グレード品以下の品質となっています。クレモナ（アルバータ州中央部・非灌漑地域（ドライランド））でも、天候が安定せず、レスブリッジよりも作柄は悪く、過去最悪に近いほど深刻な状況となっています。

両産地とも米国産と同様に、1番刈の産地価格は13年産に比べて軟化傾向にありますが、作柄が悪いため、高くなりつつあります。品質についても、14年産では米国産より芳しくない傾向にあります。

スーダングラス

<インペリアルバレー産>

2回の収穫が可能な早播きが増えていることから、14年産スーダングラス全体の生産量は、昨年よりも増加している見込みです。14年産の早播き1番刈の品質は、過去3-4年で最高の作柄であったとも言われていますが、急激な為替円安の影響を受けて、日本向けのハイグレード品の荷動きが徐々に鈍化をし始めており、需要が中間グレード品やローグレード品に移行を始めているとも伝えられています。

2年以上にわたって低迷していたデュラム小麦の相場価格ですが、9月より値上がりが始まり、現在も堅調に推移しています。そのため、産地では小麦の作付面積が増えています。12/15時点でのエーカーレッジレポートによると、前年対比298%の26,647エーカーとなっており、既に昨春のピーク時(3/15時点・25,781エーカー)を上回っているのが現状です。春から初夏にかけて収穫される小麦の作付面積が増える場合は、初春に播種を始める早播きスーダングラスの作付面積が減ることとなるため、今後も小麦の相場価格と作付面積の動向には、注意が必要です。

クレイングラス（クレインは全酪連の登録商標です）

インペリアルバレーでの14年産の作付面積について、12/15時点でのエーカーレッジレポートによると、前年対比90%の15,786エーカーとなっています。産地価格について、韓国向け、日本向けともに引合いが強くなっているため、軟化せずに引続き堅調に推移している模様です。それでも、クレイングラスは禾本科牧草の中では相対的に割安感があるため、他草種から切り替えて使用することも有益であると思われます。

ストロー類（フェスキュー・ライグラス）

14年産の米国産（主にオレゴン産）ストロー類について、トールフェスク、ペレニアルライグラスともに、既に収穫が終了していますが、どちらも深刻な雨当たり被害が発生しています。韓国向け、日本向けともに引合いが弱かったため、需要が減退しているとも言われていましたが、西海岸港湾の混雑の影響も受けて、引合いも徐々に回復している模様です。14年産では供給力の不足の懸念もあるため、今後の産地価格は堅調に推移することが予想されています。

豪州産オーツハイ

西豪州では、9月下旬から降雨が続いたため、雨当たり被害が多く発生しています。雨当たり被害を免れた圃場のスタックも、刈遅れ品となっているため、中間グレード品以下の発生が中心となっている模様です。ハイグレード品の発生は、収穫されたオーツハイのうち、5%程度と限定的な見込みです。

南豪州では、収穫時期に降雨がありましたが、被害は最小限に留まりました。収穫されたオーツハイのうち、40%程度がハイグレード品となっている模様です。

東豪州（ヴィクトリア州）では、収穫中は天候に恵まれたため、収穫されたオーツハイのうち、70%程度がハイグレード品となっている模様です。この地域では8月の降雨量が少なく、旱魃傾向で、放牧用の牧草の生育にも影響が出始めていることから、オーツハイに対しては、国内向けの引合いが強くなることが予想されています。



西豪州産オーツハイ (左) (右) とともに ローグレード品スタック 12/11撮影

14年産オーツハイは、どの産地も収穫が11月までに終了しています。

西豪州産はハイグレード品の発生が非常に少なく、中間グレード品や雨あたりのローグレード品が多いのに対して、南豪州産はハイグレード品と中間グレード品、東豪州（ヴィクトリア州）産はハイグレード品の割合が多く、ローグレード品はどちらも非常に少なく、両極端な作柄となっています。産地価格については、小麦やキャノーラ（菜種）の相場価格も高くなっていることや、日本向けや韓国向けのみならず、中国向けにも中間グレード品からローグレード品の引合いが強いことから、強含みで推移している模様です。特に、13年産では発生量が多く、弱含みで推移していた中間グレード品からローグレード品の価格ほど、強含みで推移しているのが現状です。

また、米国西海岸港湾の混雑については、豪州にまで影響が及んでいる模様です。日本向けのみならず、同様に、北米産禾本科牧草の船積みの遅れが続く韓国向けや台湾向けからも、豪州産オーツハイに対しての引合いが集中し、どのサプライヤーも荷動きがタイトになりつつあると言われています。

以 上